

本学教授新著紹介

「現代生活倫理講座」 全七巻

小林珍雄・エルリンハーゲン両教授の編集により、上智大学の教授陣を初め、カトリック系文化人約百名を動員、各専門分野の執筆をなさしめて完成した企画の偉大さにまず敬意を表する。第一巻「倫理の本質」、第二巻「性の倫理」、第三巻「教育と倫理」、第四巻「社会の倫理」、第五巻「マス・コミの倫理」、第六巻「文学と倫理」、第七巻「職業の倫理」より成り、そのうち本学関係者では理事の田中耕太郎博士が「教育と倫理」(第三巻所収)を、沢田和夫神父が「トマス・アクイナス」(一)をマザー・三好が「女性教育」(三)を、岡田純一助教授が「大衆社会の倫理」(四)、「社会保障と社会福祉」(四)、「現代社会における職業」についての諸問題」(七)を、稲富栄次郎講師が「プラトン」(一)、「アリストテレス」(一)、「ルソー」(一)、「教育の歴史と目的」(三)を、渡辺秀講師が「バスカル」(一)を、野口啓祐講師が「ロック」(一)、「ニューマン」(一)を、霜山徳爾講師が「性の異常」(三)を執筆しておられる。

全巻九十数項目にわたり、あまねくふれざるところなきほど、人間生活の全分野に關して、それぞれの専門家が極めて平明卒直

に実生活上の倫理を説述した点、従来の堅ぐるしい倫理書にくらべて、誠に型破りともいふべきものであり、現代の社会人に対しては日常生活に則した有力な指針を与えてくれる。しかも執筆陣がすべてカトリック信者か、若しくはその理解者であることは、おのずと理念の統一が行われていて、多くの項目がありながら読者を迷わしめることがない。全巻を通読して感じたことは、時間空間を超越した普遍的真理こそ我々人間生活の背骨とすべきものであり、それはいうまでもなくカトリシズムに他ならぬが、それによって生ずるカトリック的人生観・世界観こそ我々の生活の上に信ぜすべき絶対最高至善の道であり、真に神による被造物たる人間の道であることをますます強く思わせられた。実に本講座は全巻面白く読ませた上、よき味わいを感じしめる近來の好著であり、一般人の教養書として座右に備うべき宝著に値する。(春秋社 昭和三二年六月以降刊 各巻B6二五〇―三〇〇頁 価各巻二五〇円) — S —

海老沢有道著「南蛮学統の研究」

わが国におけるキリシタン研究は明治以来久しく教会の殉教史として信心奨励の役にたつか、外来の美術・文化史の一コマとして異国趣味の好事家に喜ばれるか、国語学者にとつては室町言語の資料として珍重されるかして来た。昭和の初期に入つてから、姉崎博士により宗教学の対象として取上げられたのであるが、わ

が史学界においては依然本道として扱われず、まことに不遇な立場におかれて来た。それにもめげず、著者は史学科出身の歴史学徒として初めてこれを歴史的に取扱い、ついに昭和十七年「切支丹史の研究」をものされ、以来十五年間にその立場から大小とりまぜて三十冊にのぼるキリシタン史の著作を公けにされ、ついにキリシタン研究を歴史学界のなかに引入れ、これを日本近世史中、抜くべからざる位置にすえつけた功は高く評価さるべきである。著者がこうして不遇な、じみぬ研究と取組んで以来二十数年にわたって終始つづけて来られた努力の結実が実に本書であり、そこに前人未踏の境地を拓かれた画期的業績を讃えずにはおられない。

本書は南蛮学統のうち、特に天文・曆学を主体として、関連する諸学にも言及して、それらを通して近代科学成立に至る文化史的系譜を明らかにし、これによる近代的人間観・世界観の形成と近代に至るための条件である鎖国否定の思想的根拠として切支丹邪宗門観の後退・払拭の現象を追求し、併せてその間に科学的・実証的・合理的精神などの生成発展の姿を究明したもので、参考書数一千冊に及ぶという大変な努力によつて完成された労作に敬意を表したい。(創文社 昭和三年二月刊 A5五四二頁 図版八、価二〇〇円) — S —

海老沢有道共編「日本史研究史料」
林 英夫

従来現われた日本史々料集は甚大なものか、受験参考書などのように漢文史料も読み下しになっていたりするものか、大学課程における日本史教授史料としては手頃のものになかった。また史学専攻の学生ゼミナール用としても高価に過ぎ、現下の学生事情に沿わない恨みがあった。こうした欠を補うべく、海老沢教授は立教大学史学科専任講師林氏と協力して、廉価な、しかも重要史料や古文書の諸形式を含む史料集を編せられた。古代・中世が全体の四分の一、さすがに近世の宗教・文化・対外関係などの関係史料が多く、また林氏の専攻する近世庶民・経済史料が重きをなしている。それは本書の特徴であり、また現下の学界の趨勢にも応ずるものではあるが、編者の専攻色が強すぎ、一般的に教授者や学生が駆使出来るかどうか疑わしい点もある。またこうした史料集として厳密な校訂と校正がなされるべきことはいまでもないが、本書には余りにも誤植が多すぎる。学生ゼミナールには誤謬の多いことも一面、直接史料を吟味させることに役立つであろうが、本書が市販されるとすれば、誤って引用される弊害の方が大きいであろうことを恐れる。厳密な校訂・校正が行われるならば、ここに始めて取められた幾つかの新史料とともに、裨益するところ少なくないであろう。(ナツメ社 昭和三年四月刊 A5一一五頁 価一八〇円) — H・A —

佐藤直助編「世界地名辞典・日本東洋篇」

さきに刊行された世界地名辞典西洋篇に続いて、ここに日本・東洋篇が出版され、手頃な地名辞典が完成されたことは、多方面の歓迎を受けることであろう。本籍の日本の部は本学佐藤直助教授が、東洋の部は本学青山定雄講師が主任となり、五カ年を費して成ったもので、日本においては最近の新しい行政区画、外国にては共産諸国家による新地名をも採り入れており、附録の難音訓画索引とともに利用価値を高めている。地名の選定、解説はほ妥当であるが、欲をいえば東洋篇とも称する限りは南方地域の地名をも採録さるべきであつたらう。(東京堂 昭和三年四月刊 B 6 六六一頁、図版二 定価八五〇円) — E —

海老沢有道著「南蛮文化」(日本歴史新書)

著者はさきに「キリシタン文化概説」(昭和二十三年 青年評論社)を出され、従来のキリシタン文化史に不足がちであつたキリシタン本来の教理・精神・思想・倫理などに関する深い理解をもつて、内外史料の駆使と新しい研究の成果とを加え、一段と深い究明を進められた。殊にキリシタン諸科学については、従来の皮相的觀察から脱して、その後代に対する影響の実体について論証せられ、所謂氏の「南蛮学統」説の梗概を呈示され、就中明清天主教書からの影響を強調されて、従来とかく蘭学を重視して南蛮学の位置を過少評価して来た日本近世文化史研究の上に少なからず書きかえを要求されるものとなつた。

それより十年、著者はその間になお進められつつあつた南蛮学統の研究成果や内外の新研究・史料を加えて一層完璧なものとして出されたのが本書であつて、内容はキリシタンの社会事業・矯風活動・教育事業・文学・美術・芸能・風俗・科学及び近代思想の成長から成り、前著とくらべてキリシタン研究の日進月歩を知るとともに、少くとも今日における最新の研究水準を示すキリシタン文化史の概説書を得たことに喜びを感じるものである。なお江戸時代を専攻する者にとつても、日欧文化交流の実体を知る好著であり、キリシタン史家にとつては重宝な一種の便覧ともなり、一般に対しては教養書且つ恰好なキリシタン史入門の手引書ともなる。 (至文堂 昭和三年五月刊 B 6 一九二頁 図版二 価二〇〇円) — K · S —

伊木寿一著「日本古文书学」

伊木博士の「古文书学」はすでに定評のあるところ。今回のその増訂版ともいふべきもので、定義・目的及び研究法・材料・形状・例文・書風・墨色・自署花押・印章・字体・用語・文体・様式の項目に分けて、上代より中世に至る古文书の研究及び取扱につき、数々の例文や豊富な写真・図版などを添えながら、詳細に説かれている。終生を古文书に親しまれ、その研究に献げられた斯学の泰斗たる著者の碩学ぶりが随所に発揮され、古文书入門書として最良の価値を有するものである。近時再び地方史研究が

勃興しつつあり、基礎学としての古文書研究が盛んになりつつある折柄、本書の出版はただに史学科学生のみならず、地方郷土史家にとつても恩恵となるであらう。(雄山閣 昭和三三年六月刊 A5二八二頁 価五八〇円) — K・S —

海老沢セミナー校註「吉利支丹心得書」

(切支丹文庫6)

昨年開設された本学附属カトリック文化研究所の日本カトリック史研究部門の第一回セミナーとして、「吉利支丹心得書」がテキストとして採られ、海老沢教授指導の下に助野健太郎助教授・内山徳子助手らにより、読解・研究が行われた成果である。本書は水戸藩が寛永年間、栃木県下の信者から没収した公教要理書の一冊で、大阪毎日新聞社刊の『珍書大観吉利支丹叢書』の中に影印されたが、甚だしい虫害の上に、これまた甚だしい錯簡があり、かつ他のキリシタン教書類に見られぬ多くの洋語の使用などから、影印以来三十五年を経た今日まで、学界でも利用されず、姉崎正治博士が、本書前半を試みに校訂された私版があるにとどまっていたものである。ここに錯簡を正し虫害を埋めて誤記を註記、厳密な校訂がほどこされ、始めて全文が通読出来るようになったことは特記するべきである。迫害下の指導的カテキスタや信者が、これを信心組講の者らに読み聞かせたあとを物語る口語の混入や、詳細なバライソ・インヘルノの觀念、ミサ典禮の解説な

どに注目すべく、現代の信心書・教理書としてもその価値を失うものではなく、かつ江戸初期の国語研究資料としても貴重なものである。聖心女子大学カトリック文化研究所、昭和三三年一月刊 A6八二頁 一〇〇円) — A・E —

執筆者紹介

- 岩下きよ子 本学教授 (教会史・宗教学) 聖心会員
- 内藤 智秀 本学教授 (西洋史・国際問題) 文学博士
- 原田 淑人 本学教授 (考古学・東洋古代史) 文学博士、学士院会員
- 和田 清 本学講師 (東洋近世史) 文学博士、学士院会員
- 大庭 脩 本学分校助教授 (東洋史)
- 助野健太郎 本学助教授 (日本史)
- 岡田利兵衛 本学分校教授 (国文学)
- 海老沢有道 本学教授 (日本近世史・キリシタン史) 図書館長
- 堤 明子 本学専任講師 (英語学)
- Ana Maria Diaz 本学講師 (スペイン語)
- 小林智賀平 本学講師 (英語学) 文学博士
- 松村多美子 本学図書館司書 (洋書目録)